

近畿病院図書室協議会第132回研修会 参加記

春日井泉江

研修会が開催された2月8日は、全国的な降雪で交通機関が乱れていて、不安ながら名古屋を出発しましたが、なんとか無事に会場に着くことができました。

今回の研修会は、事前にプレ・ワークショップとしてメーリングリストに参加し、機関リポジトリについての理解を深めてから当日参加する、という新しい形式でした。開催日の3カ月前から続いたメールのやりとりは、活気にあふれたもので、話についていくのが精一杯。とても理解しているとは言いがたく、はたして研修会の話についていけるか、と不安を抱えての参加でもありました。

2012年に開催された第29回医学情報サービス研究大会でDRF(デジタルリポジトリ連合)が企画したワークショップに、近畿病院図書室協議会もパネリストとして参加しました¹⁾。その時からのつながりで、近畿病院図書室協議会で今回初めて、機関リポジトリについて学ぶ研修会が企画されたと聞きました。

研修会に参加する前は、機関リポジトリを利用する側の視点でしか見たことがありませんでした。現在、機関リポジトリは主に大学などの研究機関で構築されており、大学の出版物や研究成果が登録されています。しかし、大学の出

版物と同様に、病院で発行している医学雑誌や紀要なども、リポジトリでの無料公開が望まれていると聞きました。メーリングリストや当日のディスカッションでも、病院紀要の発行にかかわる図書館員からの質問が多くあり、すでに利用する側から提供する側へ動き出しているのだと感じました。

研修会では、機関リポジトリについての概説にとどまらず、使用するソフトや運用パターン、著作権処理、メタデータの作成、データの登録、導入や維持継続にあたっての問題点など、具体的な話を聞くことができ、機関リポジトリを開設した場合のイメージをつかむことができました。

今回の研修会を通して、機関リポジトリについて少しでも理解できたことは、これから考えていくよいきっかけとなりました。今後、近畿病院図書室協議会が機関リポジトリにどうかかわっていくのか、病院が機関リポジトリを開設したらどう変わるのか、楽しみにしています。

参考文献

- 1) 増田徹：病院図書館と機関リポジトリ，病院図書館，2013；33(1)：36-40。